

位置と環境

深浦遺跡は、鹿児島県枕崎市中央町に所在し、花渡川河口右岸にある。

遺跡の所在する枕崎市は、鹿児島市街地の南々西約45kmの地にあり、北限にある蔵多山の山系が左右にのびて隣接する市町との境界をなしている。この山系は阿多溶結凝灰岩からなり、全市の大部分をなし、露天掘りの金鉱等が存在する。北・東・西の三方を山系に囲まれてはいるものの、南は東シナ海に面しており、北から南へと傾斜した地形を呈している。平地は、安山岩上に堆積した火山灰層から成っており、西南部が肥沃であるが、北東部ではコラ層が分布している。

枕崎市の中央を海に流れこむ花渡川は、その源を加世田市の上津貫浦口附近に発して南流し、途中元鹿籠駅附近で木口屋北部に源を発している中洲川と合流している。この花渡川流域と中洲川流域は、古くから多くの種類の遺物が出土している。

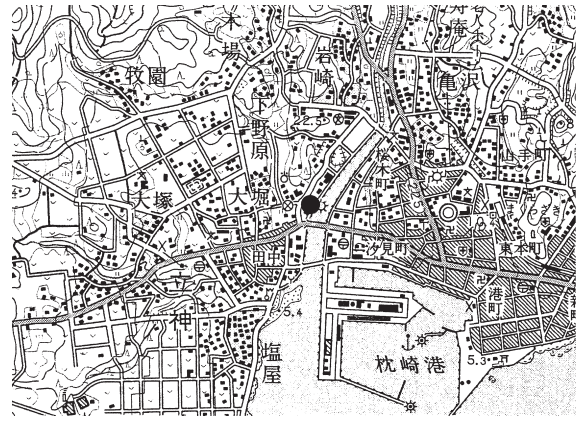
遺跡は、花渡川流域に密集しているが、これに河床遺跡や丘陵における遺跡も存在していて縄文時代から古墳時代までにわたるものが発見されている。

調査の経緯

住谷正節は、昭和14年4月25日花渡川遺跡を発見した。以後、枕崎市在住砂利採取業岡本喜八郎とともに、遺物の収集と遺跡の解明にあたり、なお付近にも3、4の遺跡を発見している。同年8月熊本県考古学会長小林久雄が岡崎敬とともに来枕して、住谷と共同調査を遂げ、その結果、九州における縄文土器の重要な遺跡のひとつとして発表した。

遺構と遺物

深浦遺跡については小林、住谷が詳細に報告している。河床遺跡であって砂層は所によって異なるが、砂層は50—150cm、砂礫層はおよそ50—100cmの厚さを有し、その下方は軟かい凝灰岩質の基盤である。この砂礫層の中より遺物を検出する。遺物は土器と石器で、土器は縄文土器のほか弥生土器があり、それに少しばかりの須恵器（祝部土器）がある。いず



第1図 深浦遺跡の位置

れも長く流水中に浸漬していたため砂礫の摩滅をうけ、辺縁表裏面など磨損したものが多く、なお長期の水中浸漬によって、無機質を吸着したためか著しく硬度を増し、重量を加えたものが多くまた土器個々の色沢も損われ、各種縄文土器の間においてはもちろん、弥生土器との区別にも困難なものが少なくない。

小林はここに出土した縄文土器をつぎの十種類に分類し、詳細に説明している。

1 細形刻文（曾畑式あるいは日勝山式土器）、2 条痕文（轟式土器）、3 隆起線文（深浦式と仮称したがこれは現在の春日式土器）、4 双曲線文（綾村a式あるいは指宿下層式土器）、5 複線文（三平行線をもって曲線を描いており、条痕文に包括すべきだと思われるが、表面の文様が特異であり、従来の条痕文土器にかつて見ざるもので形態については未詳）、6 大形凹文（阿高式、南福寺式土器）、7 縁帯文（市来式土器）、8 列点文（石坂式土器）、9 絡縄席直線文（西平式土器）、10 带状平行直線文（御領式土器）。

なおこのほかに、点を付した波状文様を有するものがあり、口唇部に刻目を付している。

縄文土器のほかに、同時出土の弥生土器・須恵器（祝部土器）のほか、石器としては、十字形石器・石斧・石匙・石錘・石鏃・切子玉がある。

特徴

深浦遺跡は「深浦式」の標識土器を出土する遺跡である。

本遺跡は、薩摩半島の南端に位する枕崎町花渡川

の河床中に存し、小江平台地突端の自然的・人為的営力による破壊のために遺物の転入流下を生じ、再堆積の結果成立させるもので、其の層位的調査は困難である。

縄文土器は、曾畑式土器を始めその種類が甚だ多く、深浦式土器、複線文あるいは列点文土器の如き新形式あるいはこれを予想せしめる土器を出し、九州縄文土器に更に絢爛たる色彩を加え、殊にその地域が九州南端に位するため、南島土器との交渉に留意すべきもの多く、将来の研究上、重要視さるべきものである。

石器には十字形石器以外は、特殊な形態は存在しない。

資料の所在

出土遺物は、枕崎市立図書館に保管・展示されている。

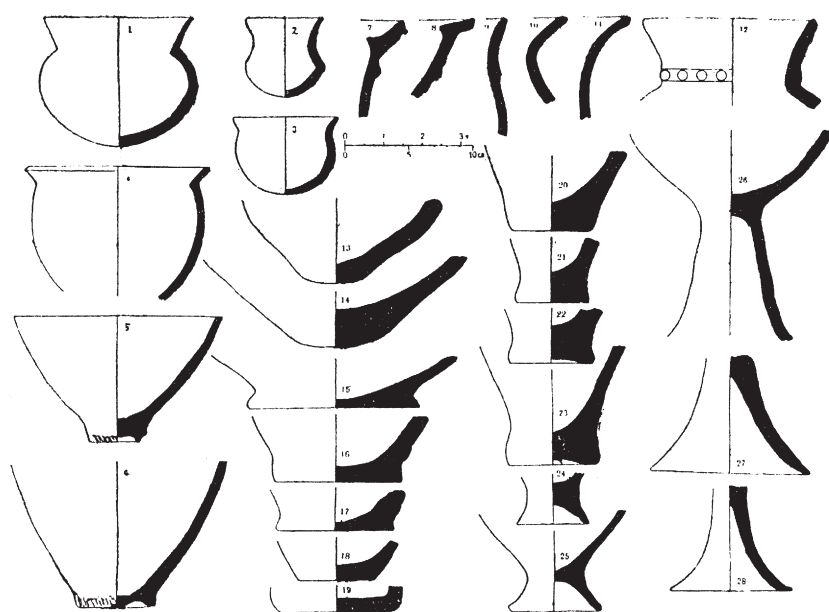
参考文献

小林久雄，住谷正節1940「薩摩国枕崎市花渡川遺跡」『考古学』第11巻第3号

(前村真次)



第2図 枕崎町花渡川遺跡発見弥生式土器



第3図 枕崎町花渡川遺跡発見弥生式土器